府立芦間高等学校
校長　安田　幸一

令和５年度　学校経営計画及び学校評価

１　めざす学校像

校訓　「自主自立」「創造」「共生」
総合学科の特性を活かし、進学型総合学科として新しい時代に求められる資質・能力を身につけた人物を育む。
１　主体的、対話的で深い学びを通し、「確かな学力」を身につけさせる。
２　生徒自らが主体性を持って思考・判断し、自分の考えを論理的に表現・発表できる授業実践を行う。
３　キャリア教育を通して、将来社会の一員として活躍しようとする姿勢や自己実現する姿勢を育む。
４　生徒一人ひとりが個性を輝かせ、多様な人々との違いを認めあい、協働して学び、人間力を高めあいながらともに成長する態度を育む。

２　中期的目標

１　「確かな学力（基礎的な知識の定着と自ら課題を見出し解決する力）」の育成と授業充実
（１）「主体的・対話的な授業を通して、生徒の論理的思考力を伸ばす授業」「生徒が主体性を持って思考・判断する授業」をめざした授業実践
ア　１人１台端末の授業における効果的な活用により個々の生徒に応じた学び（個別最適化された学び）を提供する。
端末の活用を習慣づけ、連絡等だけでなく、生徒の学びが促進するように効果的な活用を実践する。オンラインＰＴを中心に、活用事例を共有することにより学習支援クラウドサービスを活用して情報を提供する。
※学校教育自己診断（生徒㉗）における「１人１台端末を活用している」の肯定割合を生徒[Ｒ２－、Ｒ３－、Ｒ４　71.6%]・教職員[Ｒ２－、Ｒ３－、Ｒ４　67.5%]とも令和７年度には90%にする。
イ　教員がお互いに効果的な実践を探求し、授業研究を促進する。
相互授業見学を実施する。授業公開[Ｒ２　２回、Ｒ３　２回、Ｒ４　３回]を年３回以上実施する。指導教諭を中心に研究授業を実施し、活性化を図る。
※学校教育自己診断（教員④）における、「魅力ある授業になるよう指導方法の工夫・改善を行っている」の肯定割合を[Ｒ２　94.7%、Ｒ３　81%、Ｒ４　84.7%]令和７年度には90%以上にする。
ウ　主体的な学びを促し、自学自習のスタイルを確立する。
※学校教育自己診断（生徒⑤）における「家庭等での学習時間が以前より増えた」の肯定割合を[Ｒ２　51.4%、Ｒ３　43.8%、Ｒ４　51.5%]令和７年度には70%以上とする。
エ　観点別評価の定着
令和６年度に３学年がそろうが、評価方法を研究し、指導と評価の一体化を図る。
※学校教育自己診断（生徒⑥）における「成績はテストの点だけではなく、さまざまな観点で評価を受けている」の肯定割合を[Ｒ２　79.6%、Ｒ３　77.2%、Ｒ４　83.5%]令和７年度には85%以上とする。
（２）進学型総合学科としての教育課程編成を再度検討
ア　令和８年度入学生に向けた教育課程の再検討
総合学科の特色について再検討し、芦間高校総合学科の“進学型スタイル”を確立する。
※学校教育自己診断（生徒①）における「入学してよかった」の肯定割合を[Ｒ２　83.4%、Ｒ３　78.2%、Ｒ４　80.9%]令和７年度には85%以上とする。
イ　選択科目の構成について再検討し、現在の社会のニーズに対応できる構成とし、ガイダンス機能を充実させる。
※学校教育自己診断（生徒⑩）における「選択科目が多く自分の進路や興味に合わせて選べるところが魅力である」の肯定割合を[Ｒ２　86%、Ｒ３　82%、Ｒ４　86%]令和７年度には90%以上とする。

２　夢と志を育むためのキャリア教育及び確実な進路実現につながる進路ガイダンスの充実
（１）「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」等の内容とその成果の吟味とキャリア教育の体系化
ア　「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」では外部リソース（地域の企業、公共団体・大学・学校園）との連携を強化する。
イ　「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」について３年間の体系的なプログラム構築を図る。
「産業社会と人間」、「総合的な探究の時間」において、生徒につけたい力を明確に示し、３年間を通じて将来に役立つ素養を獲得させる。
※学校教育自己診断（生徒⑧）における「自分の適性や将来についてよく考えるようになった」の肯定割合を[Ｒ２　77.3%、Ｒ３　68.6%、Ｒ４　73.1%]令和７年度には80%以上とする。
（２）ガイダンス機能を充実させたキャリア教育の実現
ア　「産業社会と人間」でのキャリア教育に進路指導部による進路指導、教務部による科目選択を連動させ、進路実現、将来設計についてわかりやすいガイダンスプログラムを構築する。
※学校教育自己診断（生徒⑦）における「進路について考える機会が多い」の肯定割合を[Ｒ２　93.8%、Ｒ３　84.8%、Ｒ４　90.5%]令和７年度には90%以上で維持する。
（３）大学入試への確実な対応
ア　高大接続の変化（入試の多様化）に対応しながら、きめ細かい情報提供を行い、効率的な進路指導を実践する。
※難関私立大学（関関同立、産近甲龍）実進学者数を[Ｒ２　32、Ｒ３　55名、Ｒ４　53名]22期生（今年度１年生が卒業するとき）は70名以上とする。
（４）国際交流事業の再構築
世界の保健情勢を踏まえ、安全で効率的なプログラム提供により、国際交流を行い、グローバルな感覚を醸成する。そのためにICT活用、教育産業の活用を通じたプログラムに移行する。
ア　イングリッシュ・キャンプの充実
国内におけるイングリッシュ・キャンプにおいて、目的を明確化して実施内容を検討し、恒常的に担当者が変更となっても実施しやすい体制にし、継続性を持って行う。
イ　海外短期語学研修及び海外修学旅行の再構築
国際交流事業として、海外短期語学研修の方策見直しを図り、安価で安全に実施できるようにするため、連携協力校の確立を図る。そのうえで教育産業と連携してプログラムを提供する。
※学校教育自己診断（生徒㉘新規質問項目）における「国際理解について学習する機会がある」の肯定割合を[新規指標]令和７年度には60%以上とする。
[参考旧⑰「国際理解、福祉ボランティアについて学習する機会がある」Ｒ２　b40.9%、Ｒ３　41.8%、Ｒ４　48.7%]

３　安全安心な学校づくり及び共生推進教室と教育相談体制の充実
（１）安定した生活リズムと最低限の規律・マナーの遵守
ア　生徒が安心して学校に通える環境を整備し、きめ細かい対応を可能とする組織体制を構築する。
※学校教育自己診断（生徒⑭）における「気軽に相談できる」の肯定割合を[Ｒ２　66%、Ｒ３　63.9%、Ｒ４　65.7%]令和７年度には80%以上にする。
イ　服装、遅刻等の指導により規律やマナーについて自ら考えて行動ができるようにする。また、在学中に18歳成年になることを踏まえ、家庭教育や消費者教育、主権者教育、金融教育を進め、社会に適応できる指導を進める。
※学校教育自己診断における（生徒⑫）「生徒指導方針は理解できる」の肯定割合を[Ｒ２　54.1%、Ｒ３　55.3%、Ｒ４　65.2%]令和７年度には70%以上とする。

府立芦間高等学校

ウ　薬物乱用防止指導、安全教育の充実
外部講師を招聘した講演を実施する。薬物乱用防止や安全・安心に対する意識を高める。同時に命の大切さについて理解することができるようにする。
※学校教育自己診断（生徒⑬）における「命の大切さや社会のルール、豊かな心の生き方について考える機会がある」の肯定割合を[R２ 75%、R３ 65.2%、R４ 75.8%]令和７年度には85%以上とする。

（２）人権学習の効果的な実施
多くの人権課題を整理して学べるようにプログラムを工夫して提供し、多様性を認め合い、他者尊重できる人材を育成する。
ア　３年間の人権教育プログラムの充実。
在学３年間を見通した人権講演の３年計画を立てて実施する。内容としては、「子どもの人権」「命の教育」「ジェンダー問題」の３本の柱をもって実施する。各学年において、学ぶべき人権項目を整理し、継続的に活用できる教材を整備する。特に１年では、「障がい者理解」、２年では「同和教育」、３年では「異文化理解」を中心にしつつ、人間関係トレーニングを取り入れながら豊かな人間性を身につける。
※学校教育自己診断（生徒⑱）における「人権を学ぶ機会がある」の肯定割合を[R２ 83.5%、R３ 82.4%、R４ 91%]令和７年度には90%以上で維持する。

（３）インクルーシブ教育の推進
ア　共生推進教室における仲間づくりの充実
共生推進教室生と交流できる環境を設け、生徒会等が主体的に行動しながら定期的に交流が実施できるようにする。
※共生推進教室生との交流会を最低でも学期に１回は実施[R２ ー、R３ ー、R４ ー]し、令和７年度には年に５回定期的な交流会等を生徒主導で実施する。
イ　共生推進教室生の就労支援体制の充実

（４）防災教育の推進
ア　起こりえる災害に対して状況を把握する力を養い、自分の命を自ら守る行動を身に着けさせる。
イ　地域コミュニティとして防災活動の実施
地域社会と結びついた活動を実施することで、防災意識の向上を図る。
※近隣の保育所との防災訓練を再開し、地域とのプログラムを年１回以上実施する

４　広報活動の充実と生徒会活動の活性化
（１）進学型総合学科としての広報活動の再構築を図る。
ア　ＨＰの再構築
令和６年度までにＨＰを再構築する。
※学校教育自己診断（生徒㉓）における「ホームページは必要な情報がえられるようになっている」の肯定割合を[R２ 52.2%、R３ 44.4%、R４ 48.4%]令和７年度には60%以上とする。

（２）生徒会が主体的に活動する体制の構築
ア　各種行事（体育祭、文化祭）への積極的な関わり
生徒会活動にやりがいを持って取組み、自己肯定感の向上につなげる。特に、部活動と連携しながら、行事運営を実施することで、部活動の活性化にもつなげる。
※学校教育自己診断（生徒⑲）における「文化祭、体育祭などの学校行事に積極的に参加している」の肯定割合を[R２ 年度%、R３ 78.6%、R４年度 85.6%]令和７年度には85%以上として堅持する。
イ　ボランティア活動の推進とリーダーとしての活動の場の提供
学校内外における計画的なボランティア活動を推進し、生徒の自己肯定感とともに、社会に貢献することの充実感を醸成する。
※学校教育自己診断（生徒⑰質問文言変更）における「福祉やボランティア等について学習する機会がある」[新規扱い]の肯定割合を令和７年度には60%以上とする。
[参考　旧⑰「国際理解、福祉ボランティアについて学習する機会がある」　R２ 40.9%、R３ 41.8%、R４ 48.7%]

５　働き方改革
（１）働き方改革の推進
ア　在校時間の縮減
効率的な業務を心がけ、毎週の定時退勤日に意識して取組めるようにする。また、ノークラブデーや部活動指針を遵守し、効率的な部活動運営を行う。同時に、部活動大阪モデルについて、実施できる部活動ではペアリング校とで調整しながら、実効性のある取組みとし、超過勤務の縮減を図る。
※学校教育自己診断（教職員①）における「働き方改革を意識した取組みを実施している」の肯定割合を[R２ 68.4%、R３ 65.1%、R４ 66.1%]令和７年度には80%以上とする。
イ　会議運営等や授業において、ＰＣ端末を活用して効率的な情報共有等を行うことで、超過時間の縮減の一助となす。
※学校教育自己診断（保護者⑯）における「教育情報について、積極的に提供する努力をしている」の肯定割合を[R２ 64.2%、R３ 62.1%、R４ 60.1%]令和７年度には75%とする。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析［令和５年12月実施分］	学校運営協議会からの意見
学校選択 ＊３学年全体の数値は３年間増加しており総じて期待に応えていると考えている。 【生徒②-４】 ＊３年間の各学年での数値は１年生では減少、２、３年段階では増加はしている。 【生徒②-1,2,3】 ＊各期を追いかけてみてみると、２年生において下がっている傾向があるが、３年生では再び肯定感が強くなっているので１年生から２年生にかけての生徒の満足度を獲得するためにさらに生徒の意見を吸収していくことが必要である。【生徒②-６、７】 学習に関すること ＊授業が分かりやすいと肯定的に回答する割合が本年度概ね70～75%となっている。 【生徒③-1,2,3,4】 ＊年度ごとの増減も重要であるが、わかりやすいと感じる肯定的に回答する生徒の割合が80%台になるよう全学年の底上げが必要である。 ＊学校教育自己診断のデータではないが、授業アンケートでは、全体の平均ポイントは高く、昨年度より0.1ポイント上昇（十分良いデータ）していることと合わせると現状は評価してよいと考える。 ＊総合学科なので選択授業が多く、そのために生徒が主体的に学んでいる傾向がある。選択	第１回　学校運営協議会　令和５年６月15日　場所：校長室 【構成員】 委員：笹山幸子、千石仮名江、宮坂政宏、草野功一、髙松真由美、奥野和夫 事務局：佐々木博章（教頭）、興梠裕一（事務長）、角山愉紀雄（首席）、亀井絵里（首席）　藤井高歩、時川和也、米田浩之 【出席者】 千石仮名江、宮坂政宏、草野功一、髙松真由美、奥野和夫,佐々木博章（教頭）、興梠裕一（事務長）、角山愉紀雄（首席）、亀井絵里（首席）、藤井高歩、時川和也、米田浩之 【欠席者】 委員:笹山幸子 【内容】 1　事務局紹介・協議員紹介 2　会長及び副会長選出 3　報告・連絡事項 進路指導部・生徒指導部・教務部の各分掌長により、今年度の重点と具体的目標を報告した。 （１）令和　４　年度進路状況と今年度の目標について（進路指導主事） ①19期生進路実績→国公立１名、関関同立14名、産近甲龍39名　合格（実数） ②今年度の重点→生徒・教員への情報提供をより密に行う ③具体的な取り組み→進路資料室の紹介、クラスルームを使用して進路情報の提供、進路通信の発行 （２）令和４年度生徒状況と今年度の目標について（生徒指導主事）

科目以外の科目でも研究授業を重ね、さらに充実した授業をめざしていく。
＊少人数授業は1,2年生において効果を感じてくれている。今年度の１、３年生においては数値が低下しているので成果を出すことができていない。【生徒④-1,2,3,4】
＊少人数授業を行う上では、クラス構成方法や人数に応じた授業構成を研究していく必要がある。
＊学習時間一般的な傾向では、２年生時点での学習時間が落ち込む傾向になりがちではあるが【生徒⑤-７】、本校では２年生に学習時間が増加している【生徒⑤-４】。特に今年度の21期生２年生は１年生次の時間をキープしており、過去の２年生と比較しても学習時間を伸ばしている。【生徒⑤-５、生徒⑤-２】
＊観点別評価は現1,2年生において実施されているが、明らかに生徒は３観点で評価されていることを感じていると言える。【生徒⑥-1,2】

進路・キャリア教育に関すること

＊総合学科なので、進路ガイダンスは充実していなければならない。総じてデータは上昇しており、評価してよい。特に３年生になってからは、ほとんどが選択科目となり、各生徒が自分の進路に合わせた科目を選択できていることでガイダンスが機能していると感じてくれている。【生徒⑦-４，７】
＊１年生次の産業社会と人間において、将来について考える時間が充実していることが【生徒⑧-１】から読み取れる。進路ガイダンスの１年次の重要性を実践できていると言える。保護者からも理解をいただいていると受け止めることができる。【保護者⑦】
＊ICT 環境が発展し、職業内容が変化していくことや、ライフスタイルの充実を創造していくことができるよう、ガイダンス内容の充実をさらに図りたい。
＊「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」のプログラムの連動を考慮していくことで、各数値がまだ伸び生徒の満足度を上げることができると考えている。

人権に関すること

＊講演を実施し、生徒の心に響くプログラムを展開することで人権意識を高めていると考えている。
【生徒⑱-４、生徒⑬-４】
＊多様なテーマと人権課題がある現代社会において、生徒全員が人権意識を高めて卒業できるよう積極的な展開を考えていく。
＊共生推進教室を持つことは、「ともに学び共に育つ」社会をめざし、インクルーシブ教育を推進することは重要な使命である。次年度は「インクルーシブ教育を実践している」という新設問を設けることでインクルーシブ教育についての実態を把握することとする。

教育相談に関すること

＊教育相談は現在の学校において最重要課題だと考えている。相談できる教員が増えていることは評価できる。　【生徒⑭-４】
＊「相談できる」と回答してない層に視点を当てるとまだまだともいえる。まさに相談を必要とするその少数に対してどう対応していくかがポイントである。教育相談委員会組織を機能させ、教員一人ひとりがカウンセリングマインドをさらにもつことで、生徒の悩みに気付き、寄り添って指導を進めていく。

生徒指導に関すること

＊社会のルールや命の大切さを考える機会については伸びており評価できる。
＊生活指導については全体の数値をみると大きく減少している。保護者の理解も肯定的な割合は 62.4%と低く保護者の理解を得ることも進めなければならない。【生徒⑫-７】【保護者⑭】
＊生徒に考えさせる機会も設けながら一方的にならないよう進めることを大切にしていく。生徒が自主的に守れる生徒指導をめざす。

学校運営

＊学校の教育方針はしっかりと伝えるという設問では数値を下げてしまった。【生徒㉔-４】保護者は下げてはいないが、肯定的回答が59%では十分とは言えない。
＊生徒は、教員が頑張っていると受け止めてくれている数値が伸びていることは成果である。学年が進むにしたがい、教員の頑張りが伝わっていることもありがたい。【生徒㉕-４】

情報伝達

＊HP の充実度について本年度は改善に着手できなかった。よって生徒、保護者ともに数値は落ちている。【生徒㉓-４】【保護者㉔-４】　次年度はＨＰの改訂に取り組んでいく。
＊保護者への情報提供は内容、方法、頻度の各視点から考えていかなければならない。
＊情報提供の方法は、登録されているメールに連絡を入れて、そこにＱＲコードを掲載してアプローチしやすいように構築している。地道に理解を広めていき、多くの発信をしていく。
＊各部署で発信する内容を任せていたが、年間を通じて全体を把握し、整理することが必要であると考えている。
＊本年度授業見学には多くの保護者が参加していただいた【保護者⑳-1,2,4】。その際に行ったアンケートを教員に共有して充実を図った。

施設・設備

＊校舎内は業者の清掃だけでなく、生徒の清掃もしっかりと取り組んでくれているがデータの伸びはなく残念と感じている。予算配当上、これ以上の急な改善は望みにくいこともあることをご理解いただきたい。
＊ICT 環境については、かなり急な対応が続いており、教員の負担も大きいことをご理解い

①今年度の重点→生徒に寄り添った生徒指導　生徒の個別性に応じた指導を実施。 ②現状について→教室に入りにくい生徒がいる。早退や保健室利用も増えている。 ピアサポートでの友人関係づくりの支援をすすめたい。
→　これからは、画一的な指導は難しくなる。校外の専門機関との連携を持つことが必要
（３）令和４年度教務の課題について（教務主担）
①今年度の重点→選択科目・カリキュラムの整備
②具体的取組→新カリキュラムに対応した形に、選択の幅を狭めない群表作成をすすめる。
（４）令和６年度教科書選定について→教科書採択要領について説明を行い、次回選定結果を報告することを確認した。

4 審議事項

（１）学校運営協議会要項等改定について→学校運営協議会要項等改定について説明し、承認を得た。
（２）令和５年度　学校経営計画→令和５年度　学校経営計画について変更点を説明し、変更内容等ご審議いただき、承認された。
（中期目標５つの項目について安田校長より説明）

中期目標１・２について

（委員より）
生徒の状況の変化に合わせて、一人ひとりに寄り添った指導を実施するには、教務のカリキュラム、生徒指導、進路は軸としてつながっていることを意識されてはどうか。
その中で芦間高校の進学型スタイルを HP などで示してはどうか。また、未来人材ビジョンを踏まえたキャリア教育を見える化していくのはいかがか。
（委員より）
　インングリッシュ・キャンプの実施は決まったのか。
（回答）
コロナ前よりイングリッシュ・キャンプには取り組んでいる。学校としても薫英女学院との共催もあり、15～20名は参加してほしい。
（委員より）
教員自体の国際化について、生徒だけではなく進めてはどうか。参加されている教員はいるのか。
（回答）
現在、１名が在外教員として国のプログラムに参加中である。

中期目標３について

（委員より）
情報系犯罪に巻き込まれる心配が増えているが、学校として何かすすめているか。
自転車でのヘルメット着用について、どのように指導されているか。
（回答）
防犯教室の開催を守口警察署とともに連携して行っている。
ヘルメット着用については努力義務のため、強制はしていない。

中期目標４について

（委員より）
ボランティアを生徒が行うための元となる組織はあるか。
（回答）
ボランティア部としては無い。ボランティア担当がある。生徒が自主的な活動をする際の窓口となる。

中期目標５について

（委員より）
働き方改革を先生方は意識されているのか。
（回答）
意識はされているが、体制が追い付いていない。ストレスを感じないような方向にしていきたい。
ICT 活用での業務軽減には、生みの苦しみがある。
（~~回答~~委員より）
保護者へサイト上で様々な情報発信をされている芦間高校では、どのような工夫がされているのか。
（回答）
本校で保護者に見ていただいているサイトは、保護者限定としてメルマガの配信で URL をご存じの方だけが見られるようにしています。

5 協議

（１）芦間高校の課題と提言
①各協議員より
　国際交流の活動再開を受けて、後援会として国際交流基金への寄付を考えたい。
　学校からの案内や連絡がメールで来ることは、保護者として助かる。
②その他
　校長より　総合学習、教育相談、ICT 関係なども次回に報告

第２回 学校運営協議会 議事録　令和５年 11 月 11 日（土）８:30～12:15　場所：校長室

【構成員】委員：笹山幸子、千石仮名江、宮坂政宏、草野功一、髙松真由美、奥野和夫
事務局：佐々木博章（教頭）、興梠裕一（事務長）、角山愉紀雄（首席）、亀井絵里（首席）、米田浩之（教務部長）
【出席者】笹山幸子、千石仮名江、宮坂政宏、草野功一、髙松真由美、奥野和夫、佐々木博章（教頭）、
興梠裕一（事務長）、角山愉紀雄（首席）、亀井絵里（首席）、米田浩之
【内容】
１ 会長及び副会長選出　（第１回に保留していたので。）　会　長：笹山幸子　副会長：千石仮名江
２　１時間目と２時間目に授業見学　すべての授業一覧と記録用紙を配布してフリーで見学。
３ 報告・連絡事項
（１）令和６年度用教科用図書の採択について確認　教務部長より　特に質問・意見はなし
４ 審議事項　なし
５ 協議　授業改善について
（１）授業アンケートについて　第１回授業アンケート内容について校長より説明
・授業に対する評価は総じて良いと言える。 選択科目が多く、生徒が前向きに取り組んでいるため。
・12 月に実施する第２回で改善がみられるかをみたい。
・指導スキル、寄り添い、ICT 機器の効果的な活用等の点において改善が進んだのではないか。

ただきたい。それでも昨年度より活用を伸ばしている今回のデータではっきりとわかる【生徒㉗-４】。
＊今後はより効果的な活用について模索し、生徒の学びにつながるよう臨んでいきます。

学校行事・生徒会活動

＊コロナ禍から脱し、通常運営が再開されたことは大きいと思われる。【生徒⑲-４】
＊生徒が積極的に生徒会活動に参加している回答は伸びていない。【生徒⑳-４】
＊行事の取り組みも含めて、生徒とともに企画していくことを大切にしていく企画運営を進め、充実感をもたらしたい。
＊学校生活全般において生徒会が中心となり、生徒の話し合いを尊重する進め方を広げていきたい。

部活動

＊部活動は加入率を上げることにこだわらず、部員が自己実現、自己肯定の場となるよう指導している。そういう視点で考えると、今回の数値は伸びてはいないが【生徒㉑-1,2,3,4】、現在部活動に取り組んでいる状況に悲観的にとらえることはない。部活動参加者自身が充実していると感じること。また部活動に参加していないが、参加している仲間を応援できる環境を作りたい。
＊教員の働き方改革と重なり、運営に苦労していることは理解をいただきたい。限られた活動時間にいかに効果的な活動を提供できるか、自発的なチャレンジを生み出せるかを考えていく。

・論理的な思考を伸ばす試み、（観点別）評価と指導の連動、主体性が尊重された学びの試み等の点は、まだこれからの課題。

（２）協議

各委員より授業見学の感想

・ICT を使う授業が多くなり、分かりやすい。　・ペアで意見交換、プレゼンの練習、プリントも分かりやすい。
・板書のみだったが、先生が横向きの姿勢で立ち、生徒は読みやすく写しやすい。生徒の視線を配慮して授業を行っていた。
・ICT を使い楽しそうにやっていたが、どんな学力をつけるか、論理的思考をどうつけるかが大切。
・小テストから授業に入るのは、集中させる点、復習になる点でよい。
・国語の授業だが、図を使って見える化していた。論理的思考を高める点でよい。
・実物で見せることで、抽象的ものが具体的になる。
・「子豚の裁判」（主権者教育）は、教材がすごく良い。生徒も一生懸命見ていたし、まず自分で考えさせていた。
・パレスチナを扱った授業では、それぞれの国の立場を考え、タブレットに打ち込ませていた。班で発表者を決め、比較させた上で、書き直しをさせていたのはよかった。
・ひたすら板書を写す授業で、会話がない授業もあり。
・班ごとの活動では、生徒は関係のない話をしている班もあった。
・プリントを使っていたが、単純作業で説明中心の授業は、寝ている生徒がいた。
・全体的に、評価のめあて（今日はこれができるようになったらＡ）をはっきりと生徒に伝えるほうがよい。
・塾でもタブレットを使うことが増えているが、体育や美術などでは、どうやって ICT を使うのだろう。
・同じ科目の授業でも、ペアやグループで活動し楽しそうなクラスと、先生が読んでしっかり教えているクラスがあったが、どちらが生徒は理解しているのだろう。
・それぞれメリットとデメリットはあるが、楽しい授業は、知識・理解の面ではどうなのだろう。入試で点は取れるのだろうか。
・グループワークをしているが、あまり楽しそうでない授業もあった。この差はどこにあるのだろうか。
・寝ている生徒がいる授業もあった。説明中心の授業でも、生徒が聞いている授業と寝ている授業があるが、この差はどこにあるのだろうか。授業の組み立てや発問の仕方だろうか。
・前回の内容の見直し、リフレクションをどれくらいやっているか。
・総じてプリントを使っているが、プリント学習が理解や物の見方につながっているか。
・説明や板書中心の授業では、主体的な観点はどのように評価するのだろう。
・教員が皆で議論して授業を作ることが大事。
・クイズの場面では、タブレットで答えていて楽しそうだった。知識になっているかどうか。

まとめとして

・高校は授業改革が遅れていた。チョークだけで分からせる授業ができるのはすごい先生ではあるが。
・観点別で何を見ているか、教科の中で良い先生の授業を共有するのもよい。
・授業や日常で生徒と向き合っているかがまず大切。
・ICT がメインになると、中身を吟味し、短縮した時間を思考に使うことができる。チョークだけでできる人も、ICT を使えば思考に時間が使える。
・論理的思考は、グループワークの時間や難易度を考える。
・授業の最初に目標を示すことで、評価と指導が連動する。
・実技科目の ICT 活用について、デザイン関係の授業では使っている。体育では振り返りに使っている。
・10 年研や有志の教員が、授業を変えようとしている。その授業を見ていただけてうれしい。
・論理的思考力は、生徒がどうできているか、思考力を可視化する。
・授業改善の取り組みとして、これまでに４人が授業公開をした。
・観点別評価と授業の連動に関して、まだ試行錯誤中。

今後の授業見学の方法について

・今回は、各委員が自由に見学したが、１つの授業を定めて、その授業に対して一緒に見学をして、意見交換をする方法も考えられる。

第３回 学校運営協議会 議事録　　令和６年１月 31 日（水）15:30～17:00

【構成員】委員：笹山幸子、千石仮名江、宮坂政宏、草野功一、髙松真由美、奥野和夫
事務局：佐々木博章（教頭）、興梠裕一（事務長）、角山愉紀雄（首席）、亀井絵里（首席）、米田浩之（教務部長）
【出席者】笹山幸子、宮坂政宏、草野功一、髙松真由美、奥野和夫、佐々木博章（教頭）、
興梠裕一（事務長）、角山愉紀雄（首席）、亀井絵里（首席）
【内容】
１　校長挨拶
２　報告事項
（１）令和５年度学校教育自己診断について（校長）
＊新規に質問を加えた項目と　　防災教育について
＊質問を分離させた項目　　国際交流と福祉→国際交流についてと福祉について
＊すべてのデータをグラフで示すこととした。
＊保護者アンケートは昨年度約 30％回収率で分析できる状況ではなかったので、今年度は紙文書により実施。おかげで約 70%回収できた。
＊各学年１年次～３年次を比較できるグラフ、今年度の各学年を比較できるグラフを追加し、各学年が取り組みの変化を考えやすいようにした。
（２）令和５年度学校経営計画評価案１、令和６年度学校経営計画案について（校長）
＊資料を提示し説明を行った。
＊評価について　各項目の説明を行った。
＊令和６年度計画の中期計画では次の内容修正を報告
＊１（１）イ　「全校に設置された電子黒板機能付きプロジェクターの有効活用について促進を図る。」を追加
＊２（１）産社、総探の再構築を追加
＊２（４）国際理解教育の促進　国内でのプログラムや授業での国際理解教育を進めることにより、充実させていく内容に改めた。
＊３（１）「教員一人ひとりのカウンセリングマインド意識を高める。」内容を追加。
＊３（３）インクルーシブ教育推進の内容について文言を変更

府立芦間高等学校

	３　協議　　進行：笹山会長 委員：働き方改革の項目で、教員の評価が低いことが気になる。 校長：16 件の教員からの提言にもあったが、教員との話し合いが必要か。単純に仕事の時間を減らすのではなく、どれだけサポートできるかも大切。 委員：文書のデジタル化を進め、HP にも配布プリント等を掲載しているが、文書の量が多く難しい言葉で書かれているので、保護者に伝わりにくい。配信するプリントの構成を工夫してはどうか。 教頭：会議資料のペーパーレス（デジタル化）に取り組んでいるが進んでいない。 メルマガに登録した保護者だけが閲覧できる保護者サイトを開設し、HP には掲載できない行事の写真等を掲載し、メールでお知らせしている。アクセス数は多い。 首席：保護者サイトに各学年から教頭に申し出でて掲載してもらい、メールで保護者にお知らせしている。1,2 年の保護者は生徒数を超える登録数があるが、３年はやや少ない。 教頭：最近、各学年からの掲載依頼が減っている。もう少し、教員が意識して発信するとよい。 委員：実態と自己診断の評価にギャップがある。共生では１年生から就業を意識させているが、総合学科ではどうか。進学型総合学科として、関関同立、産近甲龍 70 名を１年生から意識させるのが、よいのでは。芦間高校ではこれだけやってくれるというのを、卒業生が後輩や兄弟等を通じて伝えていくようになるとよい。キャリア教育等頑張っていることを、もっとアピールする場があるとよい。「先生に相談できる」が 70%は妥当な数字である。 校長：きめ細かくやっているが、状況の変化に対応するのは遅れている。変化を含めた対応の必要性を教員に対しもっと発信すべきか。 委員：前年度、前前年度と比べ、数値的には上がっているものも多く、評価できる。「指導と評価の一体化」は学校経営計画に入れるべきである。指導のあり方が適切か、ルーブリックを作るときに注意すべき。 学びに向かう力は、生徒がどこまでできたかということだけではなく、なぜできたのか、なぜできなかったのかを、生徒が自分自身で評価してそれを自分自身で改善していけるようにすることが必要。 相互の話が伝わるようにするには、インナーコミュニケーションを確立することが必要。 Web ページで大切なのは、ユーザーインターフェースとユーザーエクスペリエンスである。 ストレスチェックの数値は上がっているが、ストレス緩和要因が下がっていなければ大丈夫である。 校長：令和６年度計画の中期１（１）エは　観点別評価についての検証を行うこと。「３年間の検証を行い、引続き評価方法を研究し、指導と評価の一体化を図る。」に修正します。 委員：生徒の肯定感が高い。授業参観の参加率が高かった。生徒との関わりが高いのは学校を良くしていきたいという意識の表れである。人のせいにするのではなく自分は何ができるのかを考えていくことが大事。 京セラ稲盛会長の職場づくりは参考になる。 首席：授業の内容や進め方について、担当者間ですり合わせをする時間もない。教材を ICT 化するために１日中パソコンに向かっている教員も多い。 委員：どの学校もできているわけではないが、積み重ねていくことで、目標に近づくことができるので、あきらめないでやっていくことが大事。 教頭：10 年目研修対象教員を中心に、授業改善の取組みが進められており、今後はこの取組みを教員全体へとどう広げていくかが課題である。 令和６年度学校経営計画案 「めざす学校像」、「中期的目標」に「指導と評価の一体化」を追加する形で承認。 校長：本日のご協議内容を踏まえ、一部修正を検討したい。後日お届けするので、その上で最終承認願いたい。 【３】次年度について （１）校長より各委員に連絡をします。

３　本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R４年度値]	自己評価
１ 確かな学力の育成	（１）１人１台端末を活用した授業実践	（１）	（１）	
	ア　１人１台端末の効果的な活用	ア　端末を効果的に活用し、個々の生徒の学びを促進する。	ア　学校教育自己診断（生徒㉗）における、「１人１台端末を効果的に活用している」の肯定割合を 75%以上とする。[71.6%]	ア　昨年度より明らかな上昇があった。すでに活用していた授業で活用の質がさらに高まったからなのか、基本的な活用をする教員が増えたことが寄与したからなのかの２面がある。両面が地道に広がっていると分析している。担当部署が積極的な関りを深めることでさらに促進が進むと期待している。83.1%(○)
	イ　相互授業見学と授業研究	イ　授業研究を設定し、指導教諭を中心に授業改善を図る。	イ　学校教育自己診断（教職員㉗）において、「日常的に話し合っている」の肯定割合を 80%とする。[76.9%]	イ　10 年目研修対象の５名が働きかけることで改善を図る場面も見られたが、指導教諭を中心に改善への働きかけを持つことができなかった。72.9%(△)
	ウ　自学自習の促進	ウ　有意義な課題設定、端末の活用、教育産業のデータ活用等を工夫し、生徒の学びの意欲を醸成する。	ウ　学校教育自己診断（生徒⑤）における「家庭学習する時間が増えた」の肯定割合を 55%以上とする。[51.5%]	ウ　学年、教務、進路において新たな対策が進められたわけではなく現状維持。１年生では各教科、科目から学習方法をまとめて配付する等の取り組みを講じたが、増加につなげるには至らなかった。50.5%(△)
	エ　観点別評価の定着	エ　指導と評価が連動し、授業での充実感を高める。	エ　学校教育自己診断（生徒⑥）における「成績はさまざまな観点で評価されている」の肯定割合を 85%以上とする。[83.5%]	エ　1,2 年生では観点別評価が導入されており、生徒にも伝わっていると言える。今後はその中でも、「思考判断表現の評価」「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法を研究していくことを求めていく必要がある。87.1%(○)
	（２）進学型総合学科としての教育課程の検討	（２）	（２）	
	ア　教育課程の再検討	ア　希望進路ごとのガイダンスを充実させるた	ア　学校教育自己診断（生徒①）における	ア　生徒の肯定感は確保できているが、今後を

府立芦間高等学校

		めに教育課程全体の再検討を行い、生徒のニーズに応える。	「入学してよかった」の肯定割合を85%以上にする。［R２　83.4%、R３ 78.2%、R４ 80.9%］	見通し、教育課程の再検討に着手するまでには至らなかった。ガイダンスは昨年度までの流れを継続しているが、積極的な改善はなかった。 84.5%(△)
	イ　選択科目の再検討	イ　多様な学びにより、将来につながる構成を提供するとともに、希望進路につながるガイダンス機能を構築する。	イ　学校教育自己診断（生徒⑩）における「多様な選択科目が多く進路や興味に合わせて選択できることが魅力である」の肯定割合を 90%以上で維持する。［85.6%］	イ　強みであるデザイン系、看護福祉系等でのニーズには応え、総合学科の多様性は出せているが、進学実績向上につなげるための科目選択構成は検討の余地があり、今後の課題と言える。「産業社会と人間」「総合的な探求の時間」でのガイダンスプログラムはさらに継続性を高めることで、満足度を高めたい。特に２年生次の探究領域とガイダンス領域のバランスを改善することは課題と考える。87.8%(△)
２　キャリア教育及び進路ガイダンスの充実	（１）キャリア教育の体系化 ア　外部リソースを活用したプログラム構築 イ　３年間の体系的プログラムを構築	（１） ア　地域企業、公共団体、大学・学校園と連携したプログラムを構築し、生徒の興味関心を高める。 イ　生徒に獲得させたい力を育成する。	（１） ア　地域企業との連携、こども園、保育園との連携、大阪教育大との連携、専門学校との連携により外部リソースを活用 イ　学校教育自己診断（生徒⑧）における「自分の適性や将来についてよく考えるようになった」の肯定割合を 75%以上とする。［73.1%］	ア　総探における地元企業、守口市、小中学校、こども園、大教大、桃山学院大学、大工大、滋慶学園と幅広く連携を行い、外部リソースを活用した活動を進めることができた。(○) イ　地域、大学との連携により進めた探究活動は新たな内容で手ごたえを感じた。生徒には身につけさせたい力を明確に伝えることを組み込むことで充実度の向上を図っていく。具体的には産社・総探におけるルーブリック作成を設け、強化ポイントを明確にすることなどの対策が必要。73.5%(△)
	（２）キャリア教育の充実 ア　わかりやすいガイダンス	（２） ア　進路指導部、教務部等が連動したガイダンスを行う。	（２） ア　学校教育自己診断（生徒⑦）における「進路について考える機会が多い」の肯定割合で 90％以上を維持する。［90.5%］	ア　数値はキープできている。学年、教務、進路が連動して取り組みたいが、なかなかその体制は取りづらい環境である。前述したが、特に２年生ではガイダンス時間が不足していた。 91.8%(○)
	（３）大学入試への確実な対応 ア　多様な入試への対応	（３） ア　多様な入試方法について情報提供を行い、進路実現を果たせるよう指導する。	（３） ア　難関私立大学（関関同立、産近甲龍）進学者数を 20 期生では 60 名以上とする。［53 名］	ア　担任団の粘り強い支援が寄与している。 12 名(○)確定人数のみ
	（４）国際交流事業の再構築 ア　イングリッシュキャンプの充実 イ　語学研修、海外修学旅行の再構築	（４） ア　国内でのプログラムを充実させ、国際理解促進をより多くの生徒に体験させる。 イ　海外語学研修、海外修学旅行の在り方について再検討する。	（４） ア　イングリッシュ・キャンプ参加希望者を 15 名以上の参加。参加者評価が 95%以上になるようにする。［100%］ イ　学校教育自己診断（生徒㉘新規質問項目）における「国際理解について学習する機会がある」の肯定割合を 60%以上とする。［48.7%］	ア　参加人数は 10 名と昨年度より少なかったが満足度は 100%なので、本企画は２年間実施して手ごたえがあるプログラムと言える。さらに複数回の実施により効果を期待できる。 10 名 100%(○) イ　海外語学研修、海外修学旅行については、実施していないので生徒のインパクトは低い。生徒費用の高騰だけでなく、付き添い費用の高騰、勤務負担からも国内でのプログラム充実により国際理解を進めていきたい。また、国際理科は英語授業、地歴公民授業、総合授業でも伝えており、トータルにとらえて機会があるかどうかを問う質問文に変更するように変更する。 ㉘45.6% (△)
３　安全安心な学校づくり	（１）規律・マナー遵守 ア　教育相談体制の充実 イ　規律遵守、マナーの尊重 ウ　薬物乱用防止教育、安全教育の充実	（１） ア　寄り添いの姿勢で生徒対応の推進。 イ　規律について理解させ、学校生活の充実を図る。 ウ　１年生における防犯教室や道路交通法を見据えた交通安全教育を更に充実させることで、交通マナーを意識して行動できるように	（１） ア　学校教育自己診断（生徒⑭）における「気軽に相談できる」の肯定割合 70%以上とする。［65.7%］ イ　遅刻数を減らす。1600 回以下に［1796 回］ ウ　１学年で外部講師等を招聘して薬物乱用防止教室を１回は実施する。［１回］	ア　目標数値は到達している。接し方について意識が高まっていると考えられる。本校に限らず教育相談対応が増えており、さらに不登校生徒への授業対応については文科省より指示がある。これらの事態を少しでも防止していくには、生徒が相談しやすい関係づくり、環境づくりが必要。そのためにさらに寄り添いの姿勢をより強くしなければならない。研修により生徒に起こりえる事例を学び対応力向上を進めていく。71.3%(○) イ　目標数値には至らないが、減少できていることは評価してよい。不登校対応が含まれており、遅刻や欠席数だけで指標とすることがなじまないと考えている。遅刻者数以外の指標設定も分析をする必要がある。 1802 回 1/18 時点(△) ウ　予定企画を実施して啓発を行っている。通学時の自転車事故は数件で収まっている状況。危険個所をグーグルで調査することで危険に

府立芦間高等学校

		する。規範意識を育む。	登下校の危険箇所の調査と周知を行う。［－］	対しての回避意識を高めていると分析している。実施(○)
	（２）人権学習の効果的な実施	（２）	（２）	
	ア　３年間の人権教育プログラムの充実	ア　系統的に人権教育を実施する。とりわけ１年生は障がい者理解教育、２年生は同和教育及び異文化理解、３年生は差別問題を柱とした計画とする。	ア　各学期にテーマに沿った人権課題を考えられる機会を設ける。学校教育自己診断（生徒⑱）における「人権について学ぶ機会がある」の肯定割合を 90%以上とする。［91%］	ア　生徒の人権プログラムでは、外部講師によるプログラムにより深く考えることを実践させている。人権課題が多様になる社会において幅広くテーマを組み込み、切り口を変えつつ３年間のプログラムを更新しながら進めていく。93.3%(○)
	（３）インクルーシブ教育の推進	（３）	（３）	
	ア　共生推進教室生の仲間づくりの充実	ア　共生生徒との交流の実現を図る。	ア　年度当初に学年集会等を実施し、共生推進教室生を紹介、挨拶する時間を設ける。［集会は０回・オンラインは１回］	ア　学年集会において紹介の場を設け、仲間として受け入れ、インクルーシブ体制をスタートさせている。芦間生との交流を図る企画を定例化することで接し方に個人差があることを知り、個人を尊重する学びの場としていく。そのために企画を増やしていく。１回(△)
	イ　共生推進生の就労支援充実	イ　個々の生徒課題を明確にした指導を進め、職場体験において成功体験を積ませる。	イ　職場体験を一人１回は参加させる。［新規］	イ　職場体験は実施した。個々の生徒に応じて実施している。そういう経験を持つことで社会性の学びとしている。参加した(○)
	（４）防災教育の推進	（４）	（４）	
	ア　命を守る行動の指導	ア　訓練を通じて防災意識を高める。	ア　学校教育自己診断（生徒㉙新規質問項目）における「防災教育を行っている」の肯定割合を 70%以上とする。［新規］㉙	ア　今年度は目標値を超えることができた。しかし全国で災害が実際に起こっているのでいつ起こるかわからないという危機感を持っている。さらに危機管理意識を高めるようプログラムを工夫する必要がある。74.1%（○）
	イ　地域コミュニティとしての防災活動の実践	イ　地域の学校園と共同で行い、防災活動が地域コミュニティとしての活動が重要であることを学ぶ。	イ　近隣の保育所との防災訓練を再開し、地域とのプログラムを年１回以上実施する。	イ　実際の災害では地域内での連携が求められる。芦間高校が守口地域のなかでの役割意識を高めることができるように、地域と連携していく機会を継続していくことが重要。 地域の避難施設として、機能できるよう守口市と連携して対応を進めている。１回実施(○)
	（１）広報活動の更なる充実	（１）	（１）	
４ 生徒会活動の活性化と広報活動の充実	ア　ＨＰの再構築	ア　ＨＰを全面的に見直し、閲覧者目線を心がけながら、学校情報を迅速でわかりやすく発信できるように再構築を行う。	ア　ＨＰ再構築を終了する。	ア　HP についての検討を進めることができなかった。予算については管理職が計画を練る。構築作業は担当者の積極的な取り組みを促していく。終了しない(△)
	（２）生徒会活動の活性化	（２）	（２）	
	ア　各行事への積極的な参画	ア　生徒会が学校行事を主体的に運営し、教職員及び生徒による協働的な学校行事となるようにする。	ア　学校教育自己診断（生徒⑲）における「学校行事に積極的に参加している」の肯定割合を 85％以上とする。［85.6%］	ア　数値は高くなっており、生徒会が生徒に考えさせる機会を持たせることで主体性をもって参加する機運が育まれている。89.4%(○)
	イ　ボランティア活動の活性化	イ　ボランティア活動への積極的な参画により自己肯定感、社会貢献の充実感を醸成する。	イ　校内における新規ボランティアを最低でも１つ実施し、学校教育自己診断（生徒⑰質問文言変更）における「福祉ボランティアなどについて学習する機会がある」の肯定割合を 55％以上とする。［新規扱い］	イ　昨年度までは、「国際理解」「福祉ボランティア意識」を同一項目で質問していたものを「国際理解」（本年度㉘）、「福祉ボランティア」（本年度⑰）に分けた。数値は低いが、設問の問い方を変えることが必要である。福祉ボランティアについては、選択科目で福祉関係の科目が開設されている。また生徒会関係組織でもボランティア活動を行っている。それらの授業での成果やボランティアの取り組み成果を学校全体に共有することを行い、自己肯定、充実感醸成の場を作り出すことが必要。 ⑰　26.0%（△）
	（１）働き方改革の推進	（１）	（１）	
５ 働き方改革	ア　在校時間の縮減	ア　いろいろな事案に対して、効率的に対応できる組織体制を構築することで時間外勤務の縮減を図る。	ア　学校教育自己診断（教職員①）における「学校は働き方改革を意識した取り組みをしている」の肯定割合を 75%以上とする。［66.1%］	ア　この数値は校長が改革を進めることができていないことを示している。教員定数が増えることはないなかで工夫をすることが求められる。49.1%(△)
	イ　効率的な業務運営の実施	イ　保護者への文書配布をデジタル化することにより、業務の短縮を図るとともに、確実な連絡体制を構築し、保護者への寄り添いを充実させる。	イ　学校教育自己診断（保護者⑯）における「教育情報について、積極的に提供する努力をしている」の肯定割合を 65%とする。［60.1%］	イ　数値は低下している。しかし文書配付デジタル化は実施している。また多くの文書を配付するようになっている。保護者に ICT 利用を理解してもらうための戦略を講じること。さらに保護者が求める情報内容とは何かについて分析することで、よりニーズに応じた発信をすることが必要である。57.4%(△)